

平成 29 年 6 月 29 日現在

機関番号：53301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24520258

研究課題名(和文)近世日本漢詩総集『熙朝詩薈』についての総合的研究

研究課題名(英文)A comprehensive study on "Kityousiwai", Anthology of Japanese Kanshi in Edo period.

研究代表者

高島 要 (TAKASHIMA, KANAME)

石川工業高等専門学校・その他部局等・嘱託教授

研究者番号：80124022

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：近世漢詩総集『熙朝詩薈』の収録漢詩に、作品番号を付し、詩題等の電子化テキストを作成した。これによって、収録詩人数、収録作品数を特定した。『熙朝詩薈』の作品及び「熙朝詩薈総目」「錦天山房詩話」等をもとに、『熙朝詩薈』に採録された漢詩の典拠となった詩集を確認し、採録の経緯を検討した。『熙朝詩薈』の編集方法について、他の漢詩集との直接的な関係を検討して考察した。採録された詩人を特定し編者友野霞舟との関係等を通して、『熙朝詩薈』について文学史的に考察した。

研究成果の概要(英文)：The collection number was given to the Kanshi of "Kityousiwai", Anthology of Japanese Kanshi in Edo period, and the text database was created. In this way, collecting poetry number and the number of the collecting poets was identified. Based on "Kityousiwai-soumoku" and "Kintensanbousiwa", original poetry text works of the Kanshi recorded and selected were collected, and the circumstances of selection and recording were examined on it. About an editing method on "Kityousiwai", the direct relations with the other collection of Japanese Kanshi was also considered. The poet recorded and selected was specified and it considered like history of literature of "Kityousiwai" by examination of a relation with the editor, etc.

研究分野：人文学

キーワード：国文学 近世文学 漢詩文学 友野霞舟 熙朝詩薈 錦天山房詩話 漢詩総集 日本漢詩

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 研究の動向

近世期の日本漢詩研究は、近時急速に多角的な視点から進んでいる。有力な漢詩人や儒学者を中心に、「詞華集日本漢詩」「新日本古典文学大系」「江戸漢詩選」「江戸詩人選集」等に注釈的研究・解題的研究の成果が結実している。近世の漢詩文学は、従来は儒学史や思想史の観点から周辺的問題として扱われる傾向にあったが、近時、文学の側からの研究が急速に深化している。また漢詩集の編纂事情についての研究も進んでいる。

### (2) 本研究の位置づけ

本研究は、漢詩集・漢詩自体を直接に研究対象とし、漢詩作品及び本文整理、漢詩総集の構成、また儒学者を一詩人の視点からみる作家論的研究など、文学の面から近世漢文学史、漢詩史研究の中に位置づけられる。

本研究が対象とする『熙朝詩薈(きちょうしわい)』正編は収録作品 14,431 首、詩人 1,456 人(以上は本研究によって算出されたもの)に及び大部なもので、近世漢詩作品データベース及び詩人データベース作成研究の重要な部分に位置づけられる。

総集・別集を併せて、近世漢詩集のあり方の研究の中に位置づけられる。

### (3) 研究代表者の従来の研究との関連や着想の経緯

研究代表者は、日本漢詩総集『東瀛詩選』について総合的な研究を実施し、その成果は『東瀛詩選本文と総索引』として刊行した。これを承けて『東瀛詩選』の編者俞曲園が編集の参考とした『日本詩選』について、その典拠詩集の特定を中心に研究した。『日本詩選』『同続編』は近世前半期を対象とする漢詩総集であるが、近世末期編纂の『熙朝詩薈』への直接的な影響を見出すに至り、『熙朝詩薈』の近世漢詩史の中での意義を明らかにすべく、本研究を着想した。近世全体を広く対象とする意味では、『東瀛詩選』と『熙朝詩薈』は共通するところがあり、一連の漢詩総集研究には方法的に関連性をもって実施することが可能であった。

『熙朝詩薈』には、採録された詩人の小伝があるが、これに研究代表者による『日本詩選』所収の「日本詩選作者姓名」なる詩人伝等の研究成果を加えて考察すること、また漢詩文学史的には、『熙朝詩薈』の編纂者友野霞舟に着目し、友野霞舟の昌平坂学問所教授としての性格を確認し、儒者詩人である友野霞舟の、近世漢詩史における位置づけを検討することを着想した。

以上のように、研究代表者における、漢詩総集『東瀛詩選』『日本詩選』の総合的研究が、近世漢詩総集『熙朝詩薈』の研究に発展的に展開し、本文研究・詩人研究・漢詩史的観点等からの『熙朝詩薈』の総合的研究を着想する契機となった。

## 2. 研究の目的

### (1) 研究目的

本研究は、江戸末期に友野霞舟によって編纂された我が国最大規模の漢詩総集『熙朝詩薈』について、漢詩本文の校定・作者詩人の伝記研究・漢詩集の構成や編纂意識の考察及び漢詩作品のデータベース化を目的とする。発展して、儒学者である友野霞舟の作品や儒学者としての立場を検討して、『熙朝詩薈』及び編纂者友野霞舟の近世漢詩史における位置づけを考察する。もって近世漢詩研究における漢詩総集の基礎的研究及び『熙朝詩薈』の近世漢詩史における意義についての文学史研究の一助とすることを目的とする。

### (2) 研究の対象

本研究が対象とする近世漢詩総集『熙朝詩薈』は、正編 110 巻、続編 4 巻からなり、本研究が対象とする正編は、江戸期の漢詩作品 14,431 首、詩人 1,456 人を採録する。採録された漢詩は、元和年間から天保年間まで、ほぼ江戸期全体に亘る、我が国最大規模の漢詩総集である。本研究では『熙朝詩薈』を対象に、以下の基礎的研究、文学史的研究を実施した。

### (3) 『熙朝詩薈』の基礎的研究

『熙朝詩薈』の諸伝本を確認し整理する。『熙朝詩薈』は、版行されず、国会図書館、同鸚軒文庫、内閣文庫等に稿本(写本)が伝えられる。内閣文庫本を中心として、『熙朝詩薈』の諸伝本及びその伝写の実態を検討する。

『熙朝詩薈』が典拠とした別集・総集をできる限り博捜し、それらからの採択状況を検討する。これにより定めた『熙朝詩薈』の漢詩作品をもとに、『熙朝詩薈』作品データベース作成の基礎を確立する。

『熙朝詩薈』所収漢詩人についての、集中の「作者小伝」を基礎に、雅号・学統・著作等の調査を行い、その成果を『熙朝詩薈』漢詩人データベースとする。

### (4) 『熙朝詩薈』の文学史的研究

『熙朝詩薈』が編纂された事情を検討する。その発端が大学頭の命によるものであり編纂者友野霞舟が教授となる「昌平坂学問所」を中心として編纂されたものであることに視点をおいて、その意義を検討する。

『熙朝詩薈』の編纂事情やその後の影響を検討することを通して、それ以前の『歴朝詩纂』『日本詩選』等と併せて、近世期における漢詩総集編纂の意義及び明治期編纂の『東瀛詩選』などへの展開等を見て、我が国の漢詩総集としては最大規模の『熙朝詩薈』の文学史的意義を検討する。

## 3. 研究の方法

### (1) 研究の方法

本研究は、基礎的研究と文学史的研究という2つの方法で展開され、また2つの段階的な計画のもとに実施する。

第一の基礎的研究は、『熙朝詩薈』の詩作品研究、すなわち原拠詩集との校合による漢詩作品の整理と作品のデータベース作成という、作品研究を中心とする基礎的研究である。

第二の文学史的研究は、『熙朝詩薈』中の各収録詩人の小伝・評伝に基づく、詩人の面からの文学史考察、近世期における漢詩総集編纂の意義の考察等、総じて文学史的分野の研究である。

## (2) 研究の展開

研究の展開としては、原則的に、研究の初め3年度は基礎的研究を中心に実施し、後半2年度はその基礎的な研究の成果をふまえて、文学史的研究を併せて実施した。また後半の2年度は、基礎的研究の補充すべきことにも充てた。

## 4. 研究成果

### (1) 伝本研究

『熙朝詩薈』の伝本は、ほぼ完全なものとしては、国立公文書館内閣文庫蔵(旧昌平坂学問所蔵)稿本、国会図書館蔵鶚軒文庫本の2種の伝本、静嘉堂文庫蔵本、前田家尊経閣文庫蔵本の伝本があり、いずれも写本である。これらのうち内閣文庫蔵(旧昌平坂学問所蔵)稿本は、一部に編者の友野霞舟の自筆の巻も含まれるもので、『熙朝詩薈』の原型本とみてよい。鶚軒文庫本の2種など、他の伝本はいずれもこれをもとに伝写されたものとみることができる。また西尾市図書館岩瀬文庫蔵本は、1冊のみの写本の不全本である。『熙朝詩薈』は大部なもので刊行もされていないから、伝本はわずかしかなかった。現在確認できるのは以上のものである。

これを勘案して、本研究の底本として内閣文庫蔵(旧昌平坂学問所蔵)稿本を位置づけた。

### (2) 解題的研究

『熙朝詩薈』の収録詩人、収録詩作品について明らかにした。従来は、『熙朝詩薈』「作者総目」等から推定されていたが、本研究では後述する作品データベースの作成にともない、各巻頭の「作者総目」の脱落・重複・誤写等を修正し「修訂熙朝詩薈総目」を作成し、収録詩人数を特定した。「修訂熙朝詩薈総目」の詩人の総件数は、1,486件である。これをもとに重複して掲げられている者計30件を除いた異なり収録詩人数を、1,456人と特定した。

また収録詩作品については、巻・作者別に収録詩数を特定し、「熙朝詩薈総目」記載の収録詩数とも対照させて、『熙朝詩薈』収録詩数一覧を作成した。これによって作者別収録詩作品数、及び延べ総収録詩数 14,431

首を特定した。また、この収録詩には、重複する詩が7首あるので、異なり詩数は14,424首であることも特定した。なお、『熙朝詩薈』は、典拠とした詩集から採択する際、作者と作品を取り違えて採録した詩が存在することも明らかにした。

### (3) データベースの作成

『熙朝詩薈』の各作品について、作者・詩題・巻頭句の電子化テキストデータを作成し、巻数(3桁)・巻内作者出現順(3桁)・作者別作品番号(3桁)を反映させた、作品1件について9桁から成る「作品コード番号」を付した。これによって、『熙朝詩薈』の全作品に個別の絶対番号が付されたことになり、作者・作品の特定、また作者数・作品数の特定、更にそれらの巻別のデータもただちに導くことが可能となった。これによって得た収録詩人数は1,456人、総収録詩数は14,431首であり、『熙朝詩薈』が我が国最大規模の漢詩総集であることを具体的な数値をもって示すことができた。今後、各作品のデジタル画像データと連動させることにより作品の検索機能を確立するための、基礎的データとして用いるものである。

『熙朝詩薈』には、主な収録詩人について、編者の友野霞舟が評伝を掲げた詩話(後に日本詩話叢書が、これをまとめて『錦天山房詩話』としたもの)があるが、本研究では、詩人研究の展開の便宜のために、「『錦天山房詩話』本文電子化テキスト」を作成し、テキスト中の詩人名や書名を検索するデータベースとした。併せて『熙朝詩薈』の収録詩人別に『熙朝詩薈』作者総覧を作成し、これには『日本詩選』の作者番号、『漢文学者総覧』の項目番号を連携させて詩人伝研究の基礎を構築した。

### (4) 典拠研究

『熙朝詩薈』の典拠となった(編集に用いられた)詩集について、特徴的な成果を以下に示す。

『熙朝詩薈』が編纂の典拠とした詩集を、総集・別集の区別をもって特定した。総集としては、『歴朝詩纂後編』『楽ハン集』『嚮風草二編』『徳山雑吟』『日本詩選』『日本詩選続編』『ケン園録稿』『扶桑名勝詩集』『八居題詠』等がある。別集を残す主要な詩人については、直接各詩人の別集から採択することが多い。

このうち、『熙朝詩薈』冒頭三巻について編纂方法と関連させて分析した。冒頭三巻は、総集として松平頼寛編『歴朝詩纂後編』のほか『楽ハン集』『嚮風草二編』『徳山雑吟』から採択しこれを基軸にしている。また別集からの採択は、『壺山集』『猗蘭臺集』である。これらの詩集からの採択状況を具体的に明らかにした。即ち『熙朝詩薈』巻三までは、『歴朝詩纂後編』の巻六から巻十三までに、そのほとんどを依拠して編纂されている。

『熙朝詩薈』巻三までは諸大名の詩を収録するものであり、その作品は主に『歴朝詩纂後編』であったことを明らかにした。

朝鮮通信使との唱和詩群の採択状況を明らかにした。『熙朝詩薈』は漢詩集だけではなく記録的詩集からも採択するが、その最も顕著な例が朝鮮通信使との唱和詩である。具体的な典拠としては、『韓客贈答別集』『韓館唱和』『韓館唱和続集』『韓館唱和ケンチ集』『鷄林唱和集』(数種)などが確認できた。

『熙朝詩薈』の典拠のうち、『熙朝詩薈』全体の後半は、総集からの採録が多い。例えば『熙朝詩薈』巻七十二は『日本詩選続編』にほぼ全面的に依拠している。関連して『熙朝詩薈』は『日本詩選』(正編)から採録することは少ない。『日本詩選』の作者は有力詩人で既にその別集から採ることを優先するという、編纂方法に合致していることが確認できる。これに関連して、こうして後半に至っての、『日本詩選続編』や『南紀風雅集』等の総集からの採択によって、採録詩人が重複する事例が出てくる。詩人の重複は、『熙朝詩薈』後半の、総集を典拠とした詩人群に生じている。

#### (5) 編集方法についての研究

『熙朝詩薈』の編集について、前掲(4)典拠の項で挙げた以外のことについて、以下のような特色を指摘することができる。

『熙朝詩薈』が典拠とした詩集のうち、直接には大半が昌平坂学問所蔵の詩集が用いられたことが判明した。これは、現在国立公文書館内閣文庫として所蔵されている旧昌平坂学問所蔵の漢詩集について、採択する作品であることを示す朱点が付されていることを発見したことによってこれらが直接に編集の資料として用いられた詩集であることを明らかにした。これは内閣文庫所蔵の近世漢詩集の相当数を占めるもので、関連して朱点は付されていないものでも、昌平坂学問所蔵資料が書目として該当する場合、これが用いられたことをうかがわせるものである。これによって昌平坂学問所教授友野霞舟による編集が、一定程度の公的性格も有しているであろうという意義付けを示すこともできた。

『熙朝詩薈』の編集について、一つの巻の中核を成す作者詩人の詩の採択を契機として、その系に属する詩人が採択され、関連する詩集が用いられる等、巻単位の編集方法の一端が明らかになった。『熙朝詩薈』の各巻は、別集を典拠にして、少数の詩人で詩人あたりの詩は多数採択される巻と、総集を典拠にして多数の詩人で詩人あたりの詩は1乃至数首という少数の詩が採択される巻と、その混合タイプの巻と、おおよそ三様の編集方法であることが明らかになった。

以上のように『熙朝詩薈』の各巻の採択にあたっては、それぞれに一定の系譜をもつも

の、あるいは文学活動の場を連鎖的に配列する。巻頭には、有力詩人を掲げそれを核として、以下に深交の者あるいは門下生などその系譜に繋がる者が配列される。こうして有力門人の挙列から、その門人の活動の場、藩などから編まれた総集が引き出され、次には、その総集からの採択詩が配列されるという連鎖が見られることが明らかになった。本研究では、例えば巻四の巻頭は、近世漢詩文学の原点をなす藤原惺窩を核として、次にその門人が配列されその最後の位置の門人の活躍した場から編まれた『南紀風雅集』の総集から採択される。一つの巻が、総集と別集から連鎖的に編集される方法を明らかにした。

以上のように、一つの藩に限られた総集である『南紀風雅集』からの採択の様相について明らかにし、他の巻も含めて『南紀風雅集』から採択された詩人を特定することができた。このような一つの藩に限られた総集からの採択は、ほかにも『楽ハン集』『絃歌余韻』などがあり、それらの様相についてもほぼ実態を確認することができた。

#### (6) 文学史的研究の課題

収録詩の集計により、詩人別の具体的な採択詩数が一覧できることとなった。

従来『熙朝詩薈』は、近世漢詩を地域や党派に偏することなく公正に採録したものと評価されており、各詩人の採録詩数にも概ね適切なバランス感覚が反映されていると思われる。ただ本研究において、採択詩数が多数の詩人の中で、特異な存在も明らかになった。具体的には、『熙朝詩薈』巻九十四に249首(採択詩数4位)採録された浅野長泰は、近世詩史の位置づけからは別の価値観に拠るものであろう。少なくとも詩人としては必ずしも一般に知られてはならず、従来の研究でも、採択詩数の上位者についての言及はあるが、浅野長泰については触れたものはない。『熙朝詩薈』の編者友野霞舟の学問上の系統に関わる配慮が関わるとと思われるが、今後、更にその背景を検討する必要がある。編者の近辺には浅野長泰の別集のような資料があったかと思われるが、収録数において第4位の上位に位置した特異な詩人と、編者友野霞舟との関係を明らかにすることが文学史的にも重要な課題となることが明らかになった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

#### 〔雑誌論文〕(計5件)

高島要、『熙朝詩薈』の収録詩—近世漢詩総集『熙朝詩薈』についての基礎的研究(四)—、石川工業高等専門学校紀要、査読有、49号、2017、1-15、  
高島要、加賀藩漢詩文芸のかがやき、北國文華、査読無、67号、2016、232-236、

高島要、『熙朝詩薈』における『南紀風雅集』－近世漢詩総集『熙朝詩薈』についての基礎的研究(三)－、石川工業高等専門学校紀要、査読有、47号、2015、1-11、

高島要、『熙朝詩薈』冒頭三巻の編纂手順と典拠詩集－近世漢詩総集『熙朝詩薈』についての基礎的研究(二)－、石川工業高等専門学校紀要、査読有、46号、2014、94-104、

高島要、『熙朝詩薈』の作者総目－近世漢詩総集『熙朝詩薈』についての基礎的研究(一)－、石川工業高等専門学校紀要、査読有、45号、2013、97-110、

〔学会発表〕(計2件)

高島要、『熙朝詩薈』とその典拠詩集について－『熙朝詩薈』巻四までの編纂手順を中心に－、北陸古典研究会・平成26年度春季研究発表会、2015年3月28日、金沢大学サテライトプラザ(金沢市)

高島要、『熙朝詩薈』の作者総目と編集方法について－「熙朝詩薈総目」の整理と検討－、北陸古典研究会・平成24年度春季研究発表会、2013年3月30日、金沢大学サテライトプラザ(金沢市)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

高島 要 (TAKASHIMA KANAME)

石川工業高等専門学校・一般教育科・教授  
研究者番号：80124022

### (2) 研究分担者

無

### (3) 連携研究者

無

### (4) 研究協力者

無